

Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a historical document or letter. The text is written in a cursive style (sōsho) and is contained within a rectangular frame.

九年

丁酉

秋田藩士

大田 政一





与院君親和而阻能言諫事

举国人善名者和心然皆畏去院

不敢明言

李最想改政而指为院君

所阻和心也

建君为王之父故能其

先心悼之

决决入矣於後可以成事

李国西大臣别得院君之信字柳

最想至鎬之類也 院君在也

大隈君也 亦之是應 而院  
君立元即 領議政人 性亂  
少の 李最應 与院君不命

関在鑑入 何等 官事  
其曹判書 中関林 鑑之 弟也  
此兩人皆 王和而 親信 於國王





二月十六日午後八時四十分訓導官玄音運來館浦瀨署書記  
之ニ應接セシニ彼云フ小官申尹大臣及ニ趙留守ノ教ヲ受テ未  
ル所以ハ他事ニ非ス唯今鎮海門ト江都南門ノ中央ナル亭子山ニ  
於テ貴邦ノ人鉄炮ニ發セシ故大ニ吾國人民ノ驚訝ヲ生シ吉  
儂ニ在テ甚々迷惑ス發炮等ハ決シテ之ヲ為ス可カラサルハ貴邦  
曾テ互ニ約定セシ處ナルニ何カ故ニ發炮サセラレタルヤ敢テ問  
フト浦瀨之レヲ上局ニ報テ官本外務大臣白クソハ炮發ニハアルマシ  
テ烟火戲ナラン且ツ横ニ向テ發セシヤ天ニ向テセシヤ今一應之ヲ  
彼ニ質ス可シト浦瀨之ヲ質スニ彼果シテ應ヘ云フ天ニ向フテ  
發セリト故ニ又浦瀨大臣ノ意ヲ受テ彼ニ陳シテ云フ亭子山  
ニ於テ過刻兄等ノ認テ發炮トセシ所ノモノハ決テ發炮ニ非ス  
余等ノ隨員船ニ在リ陸ニ在ル者トノ信号ニシテ事由ヲ相報  
告スルナリ縱使ハ喇叭ヲ吹テ相報答スルト同一般尔後亦至急  
相報告スルヲ出來スル時ハ今宵ノ如キ信号ヲ為ス可アル可シ請  
フ其意ヲ豫メ人民ニ告知シ置カレヨ若シ今夕ノ事故意ノ炮  
彈ヲスル必ス横ニ向テ之ヲ發ス可シ何ソ天ニ向フテセシ須ラク其意ヲ  
詳察ス可シト遠ノ談話中差備官云南條亦來リ云フ余ニ大臣  
及留守ノ教ヲ受テ來リ問フ昨日貴邦人員八名小船ニテ通洋至  
リ上陸シテ白旗三竿ヲ建テ置キ其終ニテ歸去セリ此レ大ニ吾人ノ



疑惑ヲカス何故カ、ル所業ハアリシヤ又吾國法ニ於テ兩刻ヨリ  
ハ必ス城門ヲ鎖ス可キ先規ナルニ今夕唯今貴邦ノ人ニ各江都南  
門ヨリ歸館アリ定テ吾國法モ未タ知ラサルノ故ニ今夕故サレニ  
城門ヲ開キテ之ヲ通行セリ今後若シ公事アラハ請フ日中ニ之ヲ  
解セシメ右刻限前ニ歸館アラシメ給ハト浦瀬又大臣ノ意ヲ受  
ケ之ニ應ヘテ之ヲ通津ハ大海ニ轉續セシ水路ナリ之ニ航行ス  
ハ其權元ヨリ我ニ在リ貴國ニ在テ決テ之ヲ拒ムノ義アラサルヘ  
レ若シ我隨員上陸シテ地方ノ妨害ヲ為スアアラハ兼テ約定  
セシ如ク我當サニ之ヲ處分ス可シ其都度必ス報セラレヨ又南門  
ヲ出入スルニ至テハ余等此ニ駐留スル間ハ用事ノ出来スル昼夜之分  
ナ難シ仍テ何時ニテモ通行セシム可シ但シ兩刻ヨリハ南門スル貴國ノ  
先規ナラハ敢テ之ヲ開放シ置ク可シト云フニ非ス我隨員ノ通行  
スルニ當テ之ヲ閉テ出入ノ障礙トナラサレハ即チ可ヤリト彼意  
ハテ云ク具サニ命書ヲ領セリ當サニ之ヲ復命ス可シ但シ南門スレハ  
鎖鑰ハ必ス留守ノ許ニ收ム故ニ夜分ハ速ニ之ヲ開キ難シル若シ日没  
後ニ出入セラルハ、アラス、豫メ其事由ヲ報知シ玉ヘ然ル時ハ我方ニ  
於テモ當サニ豫メ其用意ヲ為シ置ク可シ但シ此自京ノ應見ニ  
シテ大臣留守ノ所言ハ未タ如何ナルヲ知ラズ且ツ通津ノ白旗モ請  
フ速ニ之ヲ收納セラレテ人民ノ訝異ヲ醫膏セシメ給ハント貴大臣  
ニ申達セラレヨト右談話畢テ午後九時卒分彼等辭シテ歸ル

向在屏風之山夢可成事以書于新  
 朝延河以系善時自了獲有勿金作  
 得兩團 大五如公作後云才乃  
 守土之臣不廢洋稿 朝延奉賜  
 年惟祝  
 尊儀臨重



薛清箋

石  
 森山大承  
 麾下



才之類

日本公文譯漢文ヲ添テ

朝辭人日本文ヲ讀得ルモノナリ故ニ日本文ノ草送  
セラル時ハ即坐ニ事ヲ寫シテ又ハ讀テテハ漢文  
ヲ添テレト云々ナリ

才之類

華陰後前例例並ニ事ヲ譯テ句ノ句ノ  
歳遣公知貿易等ノ事ニ華陰ヲ教句ノ句ノ  
事

後唐多氏ノ朝譯ニ事ヲ譯テ句ノ句ノ  
事アリ此ハ朝譯ノ後唐國語ヲ用テテハ  
事ノ後唐國語ノ事ヲ譯テ句ノ句ノ  
事ノ後唐國語ノ事ヲ譯テ句ノ句ノ

テハナヤ唐書ニ事ヲ譯テ句ノ句ノ  
ナリ

才之類

宋書唐書ニ事ヲ譯テ句ノ句ノ  
事ヲ譯テ句ノ句ノ事ヲ譯テ句ノ句ノ  
事ヲ譯テ句ノ句ノ事ヲ譯テ句ノ句ノ  
事ヲ譯テ句ノ句ノ事ヲ譯テ句ノ句ノ  
事ヲ譯テ句ノ句ノ事ヲ譯テ句ノ句ノ

才之類

高麗人等ノ國語ノ事

此ハ朝譯人等ノ日本文ノ事ヲ譯テ句ノ句ノ  
事ヲ譯テ句ノ句ノ事ヲ譯テ句ノ句ノ  
事ヲ譯テ句ノ句ノ事ヲ譯テ句ノ句ノ  
事ヲ譯テ句ノ句ノ事ヲ譯テ句ノ句ノ



判中樞府事申櫛

都摠府副摠管尹滋承

REEL No. 1-0029

0263

明治九年一月廿七日朝鮮國南陽府使姜潤士官一名トモ  
記官一名トヲ率ヒ日進艦ニ未訪ス同艦直ニ之ヲ大臣ニ報  
ス大臣官幸大臣小牧幹事ヲシテ往テ之ニ接セシム譯  
官浦瀨書記生隨行ス其應接ノ次オ尤ノ如シ  
彼我互ニ名刺ヲ交換シ初對面ノ挨拶畢ル

姜女曰ク敢テ問フ此諸艦ハ何國ヨリ来リ何方ニ到ルノ  
目的ナリヤ

大臣曰ク貴下ハ我大臣ノ貴國ニ派出セラル、次オチ既ニ貴  
政府ヨリ承知ノ上今爰ニ未訪セラレタル乎又ハ何等ノ  
事モ辨知セラレズシテ未臨セラレタル乎

姜曰ク余輩ハ貴下ノ地方官ナレバ其辺ノ義ハホク  
傳フセザレドモ當港ニ未泊ノ諸艦ハ必ズ其事由ヲ  
口ヒシテ上司ニ馳報スルヲ以テ其職掌トス故ニ未  
テ又事由ヲ請フスルナリ

大臣曰ク是レ我大日本國ヨリ貴國ニ差遣セラル、黒  
田井上兩大臣一行ノ船艦ナリ貴下ノ懸々爰ニ未問セラ  
レタルハ懸念ノ至リナリ

姜曰ク過日未早ク既ニ未見スベキ苦ナリシガ連  
日風浪ニ阻テラレテ其意ヲ得ズ遅延シ今日ニ至リ  
シ區不都合ノ次オナリ敢テ口フ何日頃本邦ヲ発  
セラレシヤ

大臣曰ク本月初旬本國ヲ発シ一時對面ニ寄泊シ丈ヨ  
リ直ニ此地ニ来リタル船艦モアリ又々對面ト金山浦ト  
ニ滞泊ノ上爰ニ来リシモノモアルナリ  
姜曰ク川ノ此港ニ入泊シタル船艦ノ内三隻ハ既ニ解

視セリ●知らズ何レノ地ニ向テ出帆シタルヤ

大臣曰ク三艘ノ内ニ一艘ハ江華近傍ニ至ルノ苦ニシテ又々一艘ハ水ヲ探索センガタメ近岸ニ至シナラン

姜曰ク貴國大臣ノ此行ハ何事ニ意ナルヤ

大臣曰ク其儀ハ衛キニ奉邦ヨリ官員ヲ金山ニ派出シ東萊府ニ報シ置タルバ貴朝廷ニ於テハ早ク既ニ辨認セラレタルナルベシ希クバ其趣至急京城ニ報知セラレヨ

姜曰ク余ヨリ直ニ之ヲ京城ニ報ズルノ所ハズ然モ

本日面晤ノ次オリ之ヲ上司ニ具陳スベシ左スレバ

該司ヨリ速ニ之ヲ朝廷ニ啓報スルノ苦ナリ

大臣曰ク唯今目錄ヲ以テ種々ノ物品ヲ贈ラル事意感

謝ニ堪ヘズ然モ我諸船艘ニハ殺月削ノ食糧等ヲ貯蓄

シ置タルハ聊カ欠乏ノ患ヒナシ且今當港ニ碇泊スルニ付

テハ彼是等下ニ煩擾ヲ拭クルノニモ氣ノ毒ナカト存ズ

ルノ際斯ル救多ノ物品ヲ惠投セラルハ其ニ是息外

ノ事ナリ其石子意ハ謝スルニ餘リアリト惟ドモ何分安

ンジテ之ヲ受領スル能ハザルマ、物品ノ義ハ何事辭

退イタシタシ

姜曰ク貴國トハ三百年来ノ旧交ナルニ未嘗ハ今初

テ貴下等ニ面會スル事ナレバ聊カ微志ヲ表スル

直ニ此少ノ物品ヲ呈スルノ事ユヘ何分隔意ナ

ク受納ニ下タシ

大臣曰ク真ニ貴下ノ言ノ如ク三百年ノ旧交モ有之決シテ

隔意ノアルベキ様ナシ然モ當時寒天ノ際食物等腐

敗ノ患モナク既ニ前ニモ述タル如ク殺月ノ貯蓄モ有之

之ヲユヘ厚意ノ程ハ銘謝スル所ナレドモ物品ノ分ハ何事



持帰り賜ワリタシ

姜曰ク敢テ食物欠乏ト臆テ斯ル食品ヲ呈スルノ  
意ニハサシ之ヲ買ハ斯ル物品ヲ呈スルモ貴下等ニ對シ  
テ氣ノ毒ノ次オナルニ受納不ト下ニ於テハ其以  
テ報愧ニ堪ズ退席モ出未カタキ次オツリ

再三之ヲ固辭スルモ是亦タ氣ノ毒ノ一ナガラ欠乏ノ節  
ハ我ヨリ請ホタルヲモ可有之貴下ノ懇志ハ一同ヘモ  
申聞ケ置<sup>レ</sup>バ<sup>レ</sup>モ感謝<sup>ト</sup>所<sup>ト</sup>モ先ツ物品ノ  
羨<sup>ハ</sup>何分ニモ推カヒ帰<sup>ラ</sup>ル<sup>ル</sup>様是レ祈<sup>ル</sup>

姜曰ク然ル上ハ強テ申上クルモ失敬ナレバ止カテ得  
ザル次オナリ

斯<sup>ル</sup>勿々ノ席上ニテ序居申ス<sup>レ</sup>却テ失敬ニ属スルモ斗  
リ難<sup>ク</sup>レド序ナガラ居申スベシ我邦ハ近未陽曆ヲ  
用ユル所<sup>ニ</sup>承ルニ貴國ハ昨今年頭ニ改スルヨレ國王  
殿下ハ<sup>レ</sup>様<sup>様</sup>有<sup>ク</sup>超<sup>年</sup>改<sup>サ</sup>レシヤ

姜曰ク無事ニ超<sup>年</sup>改<sup>サ</sup>レタリ

大巫曰ク大院君モ同様ナルヤ

姜曰ク是亦タ無事ニ超<sup>年</sup>改<sup>サ</sup>セリ

大巫曰ク貴政府諸臣等モ無事ニテ貴國々内モ平穩ナ  
リヤ

姜曰ク然<sup>リ</sup>

賀<sup>シ</sup>奉<sup>ル</sup>ベシ我<sup>レ</sup> 天皇陛下モ無事ニ<sup>レ</sup>超<sup>年</sup>改<sup>サ</sup>レタリ

姜曰ク謹<sup>テ</sup>奉<sup>賀</sup>ス

大巫曰ク今般流<sup>出</sup>大臣<sup>ハ</sup>我邦<sup>至</sup>重<sup>ノ</sup>大臣<sup>ニ</sup>テ右未外國々所  
ル重<sup>大</sup>ノ使節<sup>ヲ</sup>差遣<sup>セ</sup>ラレタル例<sup>ニ</sup>甚<sup>々</sup>サシ杯<sup>モ</sup>黒田大  
臣<sup>ハ</sup>陸軍中將<sup>ニ</sup>テ其麾下<sup>ニ</sup>属スル軍隊<sup>最</sup>モ多<sup>ク</sup>殊<sup>ニ</sup>内閣<sup>ノ</sup>

大議ニ参シ參議ノ重職ヲ帯ビ加ルニ我邦ノ北部ニ於テ大凡貴  
國邦域ノ半カニモ著ル位ヒノ地方ヲ惣轄シ又開拓ノ事務ヲ  
管掌セラルル方以テ特別ノ大使節ナリ

姜曰ク真ニ然ラン貴下ノ話ヲ以テ考ルニ貴國大臣ノ  
江華ニ到達セラルルニサハ我大臣該島ニ迎接シ其上  
ニテ使事ヲ面晤セラルルナラン然ルニ我邦ノ制  
規ニヨリハ本日貴下ト面晤ノ次オチ余ヨリ上司  
ニ報シ談司ニテ都城ニ傳啓セバ都城ヨリ一冉ビ  
公然口情官ヲ差遣スルナルベシ

大丞曰ク口情官ヲ差遣セラルル節ハ我レ之ニ接セン  
最モ欣然ナリ候一他船ハ乘込ミノ人員船中ニ滿シ接  
待ノ方モナキ位ヒニテ務此位ヒノ余室アルハ本艦ニ限  
ル一ニハ他船ニ乘ラレテ後ヲ存艦ニ誘引スルモ不都合  
ナレバ差シ未臨ノ節ハ必ず直ケニ本艦ヲ目的ニ導カラス  
タシ

姜曰ク江華ハ何日頃到達セラルベキヤ  
大丞曰ク天氣ノ都合ニモヨルベク且ツホダ発程ノ日限モ定モラ  
ザレドモ多分兩三日内ニハ彼地ニ到ルベシ希クハ江華亦苗  
守ノ姓名ヲ余輩ニ示セ

姜曰ク我々ノ苗守ハ趙秉式ナリトテ書江官ニ余ニテ其  
姓名ヲ書セシメテ之ヲ出ス且ツ曰ク又外ニ中軍判官ア  
レドモ其姓名リ詳カナラズ

大丞曰ク江華投鋪午後四時前ナレバ余輩ノ内不取散上陸  
シテ官廳ニ到リ苗守ニ面會スベキ積リナリ其以ノ都合貴  
下ニ於テハ如何考ララルヤ

姜曰ク其義ノ貴下方ノ便宜次ナリ候シ貴下方両官ノ中

孰レカ上陸セラルベキヤ既ニ確定セシヌナレバ諸フ事ヒニ余ニ告  
ケヨ余務メ其スヲモ京師ニ報知セン

大臣曰ク又スルハ未ダ決定セズ候一兩國大臣ノ親接前ノ諸事ト  
六ノ官官多ヨリ照會目スベキ苦ナリ其他武官ハ多人救アレ  
ルモ多クハ應接ニ空係セザルベシ貴下ノ名シ右五ノ官ノ姓  
名ヲ知ラシ一ヲ要セバ余輩ト書シテ之ヲ貴下ニ示サン

姜曰ク希クバ之ヲ示セ

茲ニ於テ官存大臣以下五ノ官ノ存官姓各ヲ書シテ

照フ

姜曰ク諸船乗組人々員ハ幾何ナリヤ

大臣曰ク乗組ノ人員ハ諸船各ニ多ク少ク差アリ余等ニテ託腹  
セザルマ、即答スル解ワズ然モ先ツ各船ニ大凡五六百人位ヒハ  
乘込ニ居レリ

幹事曰ク江華ニ於テ我大臣ニ迎接スベキ貴國大臣ノ官名ハ  
何トカ云フヤ

姜曰ク余ハ熟知セザルナリ

大臣曰ク維新我邦維新以未勅養仕ノ官ヲ置カレ勅任ハ  
此上モナキ高官ニテ黒田井上ノ両君ハ則チ勅任タリ其  
次リ美濃<sup>注</sup>シテ過刻<sup>注</sup>差カシタル五人ハ又官ニ相考ル且  
先年諸侯ヲ廢セラレ兼テ貴國ニ於テ熟知セラレタル  
前對馬ノ守宗等モ方今テ又旧稱ナク余ハ即チ今日  
ノ宗大臣ト同様ニ心得ラレテ相考ルナリ

姜曰ク委細其旨ヲ領セリ先ツ今日ハ序駈申サ  
ン序手救ナガラ船中一見ヲ許ルサレヨ今日貴方  
ニ来リタル此等ノ物品ヲ序受納ナキコソ遺憾ナ  
リ

大巫曰ク船中所見物ハ按内申付クベシ今日ハ貴國ニ渡来シ  
初メテ貴下ニ面シ辱ナキ事ナリ此係川永ク忘却致サ  
ルベシ貴物ハ悪シカラズ汲ミ分ケラレテ持歸リ賜ワレ  
トテ飲テ浦瀬ヨリ又目錄ヲ隨後ノ書記官ニ渡シ又  
倭和別レ丈ヨリ船長ノ誘引ニシテ船内残ラズ仕後シ  
午後ニ此區を離レヨリ去タリ

司譯院堂上官吳慶錫

東萊訓導玄昔運

應接始末書

浦瀬 裕通 年  
赤松 謙澄 筆記

一月三十日午前九時三十分大阜島ノ  
碇泊場ニ於テ朝鮮ノ中猛船一隻小  
船二艘ヲ維キ来テ玄武丸ノ傍ニ碇ヲ  
下ス即チ之ヲシテ日進艦ニ至ラシメ  
同艦ニ於テ宮本大丞赤山權大丞相  
接ス韓客ハ司譯院堂上吳慶錫等ニ  
訓導玄昔運トナリ

尋常ノ接禮畢ル

訓 前日既ニ来駕ノ由ヲ養リ早ク面晤ヲ  
得ニ了ヲ切望セシガ今拝眉ヲ得ル欣賀  
々々

森 子ノ此地ニ来ル何レノ日ゾ

訓 某 客臘二十八日ヲ以テ京ヲ出テ仁川ニ至リ

實船ノ既ニ南陽ニ在ルヲ聞ク南陽ハ  
仁川ヲ距ル七十<sub>三</sub>里(日本里)而シテ實  
船ハ追々開行ノ趣アレハ某若シ南陽  
ニ至ラハ却テ中途ノ行違ヒツ生セシ  
コヲ恐ル<sub>ル</sub>ガ故<sub>ニ</sub>サ<sub>ラ</sub>ニ仁川ニ留リ<sub>テ</sub>跋  
待<sub>トシ</sub>ニ昨日果シテ卯未泊ニナリシ  
エエ今日訪来イタセリ

官 殊ニ尋訪ヲ学セラレテ千萬多謝ス前日ハ

南陽府使君マタ過訪セラレ<sub>テ</sub>魚テ航甲  
ノ見舞トシテ物品種々ノ賚<sub>ヲ</sub>抵ニ預ル厚  
意ノ至リ深ク感荷イタス唯船中ノ準  
備マタ畧整フテ未ダ欠尺ニ至ラズ故ヲ

以テ物品ヲバ返壁イタシタリ今茲ニ  
俟セ謝ス

訓 南陽府使ハ其地方官タルヲ以テ意ヲ  
用フルハ固ヨリ其所ナリ今謝言ヲ  
辱ス却テ羞耻イタスナリ吾々事令  
日訪来イタスハ實ニ京ヨリノ命ニ依  
ル

堂 吾々今朝命ヲ奉スル所ハ向ニ釜山表  
ヨリ理事官廣津公ノ口陳相達シ畧  
貴意ヲ領セシニ次テ又館長代理山之  
城君ノ口陳書未リ我が朝廷モ既ニ能ク  
之ヲ領知ス付テハ辨理大臣ハ口陳書  
ト同時ニ早ク既ニ御航来ニナリシヤ否

尋問セヨトノ命ニヨリ訪来イタセシナ  
リ

宮 兩大臣即黒田井上兩公トモ既ニ無異着  
港ニ相成リ過日南陽府使ニ面晤ノ節  
某ヨリ兩大臣ハ直ニ江華島へ進マル  
ベキヲ述べシガ水路猶不熟ヲ免レザル  
所アルヲ以テ能ク測量ヲ尽クサセテ夫  
レヨリ開行ノ積ナリ

是ニテ魚ヲ用意ノ口陳書ヲ出シ  
宮 且ツ其レ等ノ事ニ付キ口陳書ヲ南陽府  
使ニ送り事状ヲ告ル積ニテ此ノ如ク書  
マデ認メタレド府使占居ノ所在モ未ダ  
分明ナラズ且ツ折節風波モ高ク彼是

延引イタシタリ幸ニ今兩君ニ會ス此邊諒  
知セラレヨ既ニ面話スレハ別ニ此書ヲ要  
セザル如クナレバ微意ヲ表スルマデニ覽  
ニ供ス

是ニテ二人共ニ前書ヲ讀ム

堂 某等途中ニテ孟春艦長ニモ會晤イタシ  
タルニ矯執九トニ隻ニテ彼地測量ニ至  
ルト兼リタリ然ルニ此書中ニ在ル漢江  
南北口ト云フハ漢江ハ都城ニ接近シ極メ  
テ小流ニシテ即江華ヨリ上ニ在リ其レ等  
御熟知ノ上ニテノ事ナルヤ

森 河流ノ浅小ニ関セス都城近傍ト當ル  
彼邊航行ノ序船ノ至リ得ル地ヲ測ル  
ナリ

堂 森山公ニハ數年来釜山表ニ御渡海アリ  
テ多少ノ公幹ニ勞意セラレシコトハ兼テ  
傳承スル所ナリ而シテ兩國ノ議遂ニ  
順成ニ歸セズ今日ニ及ビ玉趾ヲ此地ニ  
勞セラル吾々ニ於テ氣ノ毒ニ存ス

森 某兩間ノ事ニ微カラス己ニ八年一昨  
年始メテ玄訓導ニ逢遭ヒレヨリ殊ニ  
辛勤ヲ尽シタルモ事遂ニ悞ハズ以テ今  
日ノ境ニ至レリ某ガ精カハ厭フ所ニ  
非ラザレバ今ヨリ後キモ共ニ談スル所  
アルベシ君等マタ一層ノ勉勵アラレ  
ヨ

訓 既ニ兩三年間御談判申上ゲシフナルが遂ニ講和ニ至ラズ甚ダ気毒ノ至ナリ今日ニ及ビ大臣ノ航來ニ會ス大臣ノ為ス所如何ナルヤ元ヨリ某等ノ如クノ應議ニ得ルベキニ非ラズ唯此地ニ於テ面晤ヲ得ル御本意ニハ非ラザルベケレト面晤ヲ得ルニ至テハ竊ニ欣然ニ堪ヘズ

其モマタ舒懐ス事煩便ニ歸マルヲ希望スルノ念ハ今モ猶変ルコナシ

訓 先般廣津公ヨリ趣典セラレタル口陳書ヲ受テ獨リ書ノミシ我ガ朝廷ニ送ル可ラズ是ニ因テ某自ラ上京シ且ツ既往ノ情曲ヲ具陳セザルヲ得ザル

ニ付キ備ニ之ヲ陳述セシニ我朝廷モマタ發明セシ所アリ因テ某既ニ本月二日(陰曆)釜山ニ往クノ筈ナリシニ思ハザリキ貴船既ニ至レリ付テハ釜山行ヲ止マリタリ叔吳堂上ハ久ク外交ニ関係セル人エハ今般曰辨イタシタリ

既往ノ具陳ニ朝廷モ發明スル所アリトハ足下ノ誠忠ノ徹セシナリ御尽力想フベレ但シ此方ノ事状ハ先刻大丞殿ノ陳ベシ通り不日大臣ハ江華ニ前送アルベシ此上ハ迎接向等不都合ナキヤウ周旋アル

堂 是ハ公然ト申ス所ニ非ザレト敢テ某ガ



年来ノ表情ヲ吐露セントスレフ却清聴  
 下サレヨ某ハ身司譯院ニ在リテ久シク  
 外國應接ニ関係イタセリ尤モ外國ト  
 申スモ貴國ト清朝トナリ某未ダ貴國  
 ノ大臣ニ接スルコトヲ得ズト雖氏貴國ト  
 情誼ノ永ク相通セザルハ某為メ慨歎ヲ  
 懐クスレ訓導モ屢朝ニ出テ陳述セシ  
 コアリト雖氏奈何ニセンヤ我が朝廷ノ  
 事情ニ疎暗ナルコトヲ實ヲ以テ語レハ  
 昨年貴國ノ來書ノ如キハ疾クニモ領  
 受スベキナリ受ケテ若シ安シ難キ処  
 アラハ時ニ臨ンデ商量ヲ遂ケ可ナリ  
 我國前年大院君一タビ退キシガ次ニ  
 後々世ニ出テ威權ヲ專ニシ貴國ト阻  
 隔ノ情状ノ如キ某微心昔慮スルモ鄙  
 官ノ故ヲ以テ更ニ廟護ニ参ラスルコトヲ  
 得セシメズ實ニ慨スベキノ至リナリキ  
 今ヤ貴國大臣ノ來貴アルモ某如キ鄙官  
 様趣接先スレヲ得ズ唯幸ニ君等ニ見ル  
 コトヲ得タリ今般大臣ノ來航アリト云  
 一氏我が朝廷ハ如何ニシテ迎接スベキ  
 ヤ如何ニシテ酬酢スベキヤ礼式モ何モ  
 更ニ辨知スル所ナシ付テ某等ニ命ト  
 一應問情セヨトノ命ナリ宿昔ノ建策ハ  
 一モ採用セララル、所ナリ而シテ今日  
 ノ如キノ境界ニ逼シハ即チ却テ微カフ

尽シテ斡旋セヨトノ丁ナリ然レ是等ハ  
免モアシ某モ帰京<sup>臣</sup>委状ヲ我カ大臣  
ニ懇説セバ事自ラ順便ニ帰スルナルベ  
シ付テハ迎接ノ礼等如何ナル心得ヲ  
ナシテ然ル可キヤ

矣

君等ニ斡旋セヨトノ朝命アルニ至ルマ  
夕君等多年ノ勤苦ニヨル扱迎接ノ礼  
如何ニ心得テ然ルベキヤノ貴問某等  
元ヨリ大臣ノ心ノ如何ナルヲ知ラズ但シ  
大臣ハ釜山ヨリモ申シ通セシ如ク陸軍  
中將ニテ兵馬ノ大權ヲ掌握シ参議ノ  
地位ニアリテ内閣ニ参典レ一切ノ政務  
ヲ議決シ且テ閣柘長官トシテ兵ヲ置キ

民ヲ移シ一身ニテ北海道十三州即チ方  
ニ百里余大地ヲ總管セリ實ニ貴重ノ  
高官ナリ猶今般兩國重大ノ事件ナル  
ヲ以テ故ニ特命全權大臣ニ任セラレテ  
派遣セラレタリ貴國ニ對シテハ仲々宗  
敬ノ盛意ナリ又副大臣ハ元老<sup>院</sup>議官  
トシ衆多ノ機務ヲ管セリ貴國ニ於テ  
モ宜シク之ニ相当ノ大臣ヲ選出アリテ  
不都合ナキ様ニ致サレタシ

堂

大臣ノ品格ハ我カ國ノ何品官ト心得テ  
然ルベキヤ

矣

兩大臣ハ無論我カ國ノ一等官ナリ即チ之  
ヲ貴國政務全權ノ一品官ニ比セバ稍々

似タルが如し

堂

貴國ヨリ各國ニ流出セラレ又各國相差

遣スル欽差ニモ幾種ノ階級アリ今般ノ

大臣ハ矢張其一等ト思フテ然ルベキヤ

官

併シ其處ニ猶差違アリ他國ニ派遣スル

欽差ハ派遣ノ為ニ特ニ位階ヲ進メテ差

発ス今ヤ辨理大臣ハ之ニ異ナリ大臣ハ内

國ニ於テ既ニ一日モ欠ク可ラサル大任ヲ

負フタル貴官ナリ但シ兩國ノ事亦甚ク

緊要ノ大事ナルガ故ニ我皇帝特ニ此貴

官ヲ派遣シテ辨理大臣ノ稱ヲ付ス故ニ

特命ト云フ尋常欽差ト大ニ異ナリ

堂

我國ノ判書中ニモ一品ノ人アリ是ニテ

對等イタシテ可然哉

譯官

自ラ其レニテハ中々對セザルヘキヲ

ヲ説キタリ

堂

此ノ如キノ終ハ從テ某等カ意中ヨリ出テ

卒度御伺ヒ申入ナリ云シ

官

森山氏トハ年來ノ御相知ニモアリ此等

ノ事ヲ問ハル、モ兩國ノ誼ニ於テ何ノ非

カアラシ猶語ルヘキハ語ラレセ

堂

然ラハ猶心腹ヲ吐露イタサシ

我々小官何モ國事ニ携帶スルヲ得ス併シ

小官ハ小官大ノ責ナキニ非ラズ而シテ

我々内國ノ事情ハ實ニ搔痒ノ事多シ唯

今ヨリ後テ務メテ犬馬ノ勞ヲ致サント欲

官 過刺ヨリ段々御心情ノ終アリ流石外交  
 二関係イタサレシホド有テ外國ノ事情  
 ヲモ通熟ナサレルガ如シ猶其ノ見込ノ愈々  
 貫徹スル様ニ尽カアリタシ  
 訓 過刺ヨリ申セシ所ハ段々株聽セラレテ  
 感荷ニ至ヘズ付テハ森山公ノ是マデ苦  
 慮セラレシ所モ通達セザルニ非ラザルベ  
 シ前年ヨリノ遷延ハ強チニ甚ノ罪ニ非  
 ザルベキ我が國ノ事情ヲモ詳悉下サシ  
 レト存ス  
 官 去レバ都ノ事情モ進々ト紊リタリ且ツ  
 森山氏羊未ノ苦辛モ盡餅ニ属セザラニ  
 ヲ望ム先日南陽使君ニモ御咄申セシ  
 如ク貴國ハ仍大陰曆遵行ノ事ナレバ  
 此頃ハ丁度正月初メニ當レリ此際ニ  
 當リ今般ノ未航アリ定メテ多事ト氣  
 ノ毒ニ存ス保シ注視スレバ貴國モ大平  
 無事ニテ國王殿下モ清福ナリト大賀ニ  
 堂 南陽府侯ハ地方官ナレバ其地ニ船舶ノ  
 來ル之ヲ問情スルハ其任ナリ某等ト至モ  
 何ノ多事ヲカ厭ハレ且ツ國勢ヨリ殿下ノ  
 事マデモ訊問下サレ別シテ有リ難シ  
 森 向ニ釜山ニテ通告セシ通り彼地ヨリ開  
 航セシニ途中凡波順ナラス時日モ遅レテ  
 此地ニ來レリ全体我國船艦中船小ニ底

法キヲ選ビ来リシモ此地ニ来リ見レバ猶過  
大ナルカ如シ因テ先ツ浅深ヲ測量ニ後事  
セシメ猶跡ヨリ續キ来ルヘキ軍艦モアレバ  
之ヲモ待合セルナリ候シ測量サヘ於レバ  
跡船ヲハ待テ頂ヒズ直ニ諸艦前往ノ積リ  
ナリ

是ニテ茶果ヲ出ス

宮 今日杯ハ別シテ快晴ノ好天気ナリ一休  
気候ハ餘程シマリテ好キ様ニ思ハル

堂 今日ハ別シテ宜シ

英 過刻大丞殿ヨリ申セシ如ク大臣公ハ諸  
船ヲ待合セテ不日江華ニ前往セラルベ  
シ訓導ニハ別シテ迎接等不都合ナキ

様ニ注意アテレヨ此辺某ヨリ御気付  
申ス

訓 如何ニモ兼知シマシタ

堂 是レハ打明ケテ御咄申ス事ナルガ某ハ  
数度清國ニモ至リ其事情ヲモ目撃シ  
我國モ到底外交ヲ開サル可ラズ孰立ノ  
久ク堪ガル事ヲ屢々朝廷ニ上言シ貴國  
ト交誼ヲ全マザル可ラガルヲ陳スト雖モ毫  
モ之ヲ採用スルコトナク大日本ヲ見ルコト  
對馬州一般位ニ思ヒナセリ而シテ此頃ノ大  
事ニ至リ却テ某ニ依托スナド云ヘリ此節  
ニ限ラズ先年ヨリ森山公ノ来航モ一々皆  
貴國ノ厚意ニ出ルノミ他アルナシ而シテ

今日遂ニ特ニ大臣ノ起溟ニ及ビタリ大臣  
ハ直チニ江華ニ於テ談判ヲナサル、ヤ  
將々如何ナル次序アリヤ我カ朝廷、其  
其辺ハ茫トシテ更ニ辨知セズ一通リノ  
目安モナシ

官

誠ニ然リ只我輩ヲ以テ見レバ清國ノ外交  
モ誠ニ拙ナリ故ニ屢々蹉跌シテ侮ヲ外  
洋ニ遺ス併シ何レニセヨ外交ヲバ聞ケリ  
貴國ハ對島ノ事情ガニ詳悉セズ況ンヤ  
海外万国ヲヤ唯君既ニ此ノ如ノ心志  
アラバ仍尽カアラレヨ兎角ニ友朋ノ  
贈スヲ願フ

是ニテ酒ヲ出ス

堂

何カニモ突然江華ニ前進セラレテハ人々  
皆遁匿スベク留守官モ朝命ナケレハ  
外國ノ官人ニ會見スルヲ得サルユヘマタ  
何レヘカニ匿ルベシ此ノ如クバ罪大ナリ甚  
清國ニ往キ全權使臣ノ事ヲ知ル決戰  
講和其争ニアリ而シテ我朝ニテハ全權  
ガ何物タルヤモ知らズ且ツ現今大院君  
ハ退居シ執政官別ニ在リ然モ諸政皆  
極密ニ院君ノ決ヲ仰ク故ヲ以テ諸事  
因循遷延ニ及ブ丁ノミ多シ付テハ孟春  
ハ何時頃帰航ニナルヤ其レニ應シテ  
大凡何日頃江華ニ前往スト云フ  
ヲ決定下サレ京ニ報シテ其辺ノ預

備ヲナサシムルノ便宜ヲ共ヘテハ如何  
 宮 是カラ何程ノ時日ニテ京ニ達スルヤ  
 訓堂 仁川ニ至リ其レヨリ一日行ニテ達シ得  
 森 其辺ハ我々ヨリ陳述シ難シ全体疾ニモ  
 前往ノ筈ナリシニ大丞ヨリ申セシ如ク  
 猶航路ヲ精測スルカ為メ料ヲズ暫  
 間ノ遅漫ヲナシタルノミ此方ニテハ既  
 ニ貴國ニ先報ヲモ為シタレバ疾ニモ迎  
 接ノ都合ハ御差罔アルヘキ筈ナリ我ハ  
 是ヨリ順次ニ彼地ヲ指シ行クノミ其方  
 ニテハ何レニモ順便ニナサレテ然ラン  
 堂 先刻ヨリ申ス所ハ實ニ内情ヲ闕披シ  
 タル終ニテ是事一石々一我が國ニ漏レ  
 バ其ハ復タ五尺ノ身ヲ容ル、所ナシ  
 尤モ我朝ヨリモ如何ノ形状ナルヤ問  
 情セヨトノ命ハアリシト雖氏某が陳  
 述セシ所ハ一々皆某ノ意中ニ出テ決シ  
 テ朝命ニヨルニ非ラス此辺ハ萬々深諒  
 セラレシコトヲ懇願ス物大臣ノ江華ニ  
 向ハル、ヤ御用向ノ如何ナルヤハ興リ知  
 ルコトヲ得ル所ニ非ラザルハ固ヨリナリ  
 ト畠氏唯々諸事不都合ナキ様ニ所  
 相談イタシ度ハ是レ某等ノ只管望ム  
 所ナリ

森 不都合ナキ様ニ相送イタサレ度トノテ誠  
 ニ然リ而モ此方ニテハ固ヨリ直ニ彼地ニ  
 至ルヘキヲ已ムテ得ス暫ク遅漫セ  
 シ情ハ既ニ屢々申渡セレ通リナリ故ニ  
 直ニ前往シテモ不都合ナキ様ニナサルハ  
 ハ君等ノ斡旋ニモ在リ又貴朝廷ヨリ  
 モ此ノ如ク為サハル可ラズ能ク領領アル  
 訓堂 然リ實ニ江華ニ於テ恭ク迎接セザル可  
 ラス  
 官 是ハマタ某ヨリノ私談ナルガ先生ハ屢々  
 北京ヘモ往レシナレバ其事情モ熟知ナ  
 ルベシ一休國ノ大事ヲ談スルニハ必ラス  
 其國ノ都城ニ於テスルヲ常例トス北京  
 ニハ各國ノ使臣來往シ中ニハ我國ノ使  
 臣モアリ此ノ如キ形勢ナルガ故ニ此般  
 ノ事ノ如キハ我が國人ヨリ見レバ直ニ  
 貴京ニ前往シテ處分スル所アルハ  
 事ノ當前ニシテ左ノミ惟レキトモ思  
 惟セザルナリ然ルニ貴國ハ外人ヲ内  
 地ニ入レテハ風俗ヲ見ラルトカ國勢  
 ヲ察セラルトカ云ヒ婦人ノ身体ヲ他人  
 ニ窺ハルハガ如クニ思ヘルニ似タリ此等  
 ヲ洞察シ故サテニ京都前往ノ前事ヲ  
 江華島ニ定メントス從シ留守官ハ朝  
 命ヲ受ザレバ迎接セズナド云フア  
 ラバ已ムテ得ズ仁川ヨリ京マテ一日



程位ト兼マハレバ陸行ヲモシテ直ニ入  
京スル位ニ思ヘリ是モ此方ニテハ北京ニ  
使節ノ未往スルト一般ニ思ヘルナレバ深  
ク怪事トモ致サス

堂 先刻ヨリ申ス所ハ凡テ我が國情ヲ打明  
ケテノコトニテ當所ハ勿論釜山辺ニ於テモ  
此談若シ少モ我カ國人ニ漏レハ實ニ  
罪ノ當ル所ヲ知ル可ラズ故ニ今日ノ  
談ハ悉皆聞棄ニシ下サレヨ聞棄ニシ  
下サルトナラハ猶陳說セント欲スル所ナ  
トニ非ラズ

宮 誠ニ然ナリ今日ノ事ハ相互ニ懇然トナ  
サン深ク勞意セラレザレ  
堂 落心ヨリ付スガ江華島ニ前往シ上陸  
ノ際ニ當リ若シ兇徒等ノ暴挙等ア  
ラハ何ト思召サルヤ

宮 其事モシ貴朝ノ意ニ出ルニ非ズシテ  
實ニ野民ノ挙ニ出ルナラハ此方ニテハ  
之ヲ犬ノ吠ユル位ニ見做シ深ク無禮ト  
認メザルナリ

堂 實ニ我國ニ對シ身ヲ措ク所ナキ談ナ  
レバ萬モ外泄セガラシク未  
阿米利加船ノ来ルヤ大院君恰モ全權  
最中ナリ爾時某ハ君ニ説ニ到底外交  
ヲ開ガル可ラザル所以テ以テセリ然ル  
ニ米船ハ僅々ノ砲發ヲ受テ其終ニ

退去セシニヨリ有來某ヲハ目スルニ聞  
港家ト云フヲ以テ何等ノ事ヲ陳  
スルモ更ニ採取セラル、丁ナシ貴國  
トノ交際モ之ヲ修メサルヲ論スルモ申  
サハ蛙面ノ水ニテ今日ニ至ルト蛙氏天  
張米船ノ容易ニ退去セシト同一般ノ事  
位ニ想像セリ故ニ江華ニ前住セラ  
レバ或ハ不虞ノ小暴動位ハ之レナキ  
ヲ保シ難シ且ツ留守官モ是マデ洋形  
ノ船舶ハ打壞フヘキノ令アレハ今回  
ノ如キモ別ニ制止ノ朝命ナキニ於テハ  
必定抗拒スル丁アルベシ今日ノ勢ヲ  
以テ見レバ大臣彼地ニ至ラハ直チニ  
上陸シ威嚴ヲ示サル、ニ若クハナシ  
然ラザレバ復々遷延滯留釜山ノ談  
判ト異ナラザルノ形況ニ陥ルベシ既ニ  
此位ノ形勢ナレバ今日ノ此ノ形況ニテモ  
某等ヨリ是ヲ啓報スルモ一モ信心スル  
者ナシ今回ノ事タルヤ一たび蹉跌ス  
レハ實ニ萬民茶炭ノ苦ヲ惹出ス之ヲ  
恐ル、カ故ニ斯クマテ内事ヲ打明ル  
ナリ

宮 此方ニテモ御注意申サシ彼ノ八年前  
阿米利加表船ノ事ハ北京駐留ノ米國  
公使ト東洋滯航ノ海軍將官トノ意  
見ニ出ラ事ヲ拳ゲタルニテ本政府ノ

意ニ非ラス故ニ其後再尋ニモ及バス  
 トノ丁佛蘭西モ其通ナリト僣レ今  
 回辨理大臣ノ一事ハ現ニ日本天皇ノ嚴  
 命ヲ奉セラレテノ丁ナレハ之ヲ八年  
 前ノ事変ニ比セラレテハ提燈ト釣鐘  
 天ト淵トノ差アリ序ニ出シマス  
 其事ハ其モマタ能ク辨知ス而モ其今  
 假レ此等ノ京ニ啓報スルモ信實トナス  
 者ハ一モナシ先年某ノ支那ニ在リシ  
 ヤ衙門ニ於テ貴國致差ノ我カ國ト臺  
 湾ト瑪港ノ三事ノ談判ニ涉レルヲ見  
 テ之ヲ我カ朝ニ上陳セシカド奉朝  
 更ニ之ヲ信セズ次ヲ征台ノ尋アルニ  
 及ビ其レ見タカ此次ニハ事我回ニ及  
 フゾト迄ニ論説シタルモ猶且ツ信ヲ  
 置クナカリキ歎スヘシ  
 官 其レハ常々用意慎密感服ノ至リ  
 堂 今一見アリ思フニ海外各國ヨリ早晚  
 手ヲ我國ニ出スニ相違ナシ一体ハ我國  
 ヨリコソ交ヲ貴國ニ修メ緩急ニ際シテ  
 斡旋ヲモ顧フヘキ筈ナリ其レニ引替ヘ  
 今日ノ現況ナリ歎ス可シ  
 森 其程ノ御志ナラハ此上トモ御骨折ヲ顧  
 フ  
 堂 此回ノ事ハ何レ萬民ノ荼炭ヲ惹出スニ  
 至ラニ丁ヲ恐ル其今自國ニ對シテ此言ヲ

吐クハ實ニ如何ノ訣ナレバ貴大臣ノ江  
華ニ至ラル、ヤ可成丈ハ威嚴ヲ張ラ  
レヨ某屢々事ヲ我カ大臣ニ陳スルモ  
大臣ハ更ニ世ノ形勢ヲ知ラス今日ニ  
及ブハ茫然昨ノ如シ江華ニ前進セラ  
レハ或ハハ暴挙ナキヲ保ス可ラザル  
モ我朝義ニテ抗拒スル事ハ逆モ出来  
不是ニ固テ精一杯ニ國威ヲ張ラヒヨ  
両君能ク領セラレヨ

森 領意不然シ大臣ノ意ノ何ニ出ルヲ知  
ラズ

堂 此程迄ニ陳説セバ我國ノ事情ハ大抵  
ニ洞察セラレシナラン

森 左様大抵詳悉イタレタリ  
最前御咄シノ孟春艦ニハ何レノ地ニテ  
過ハレシヤ

堂 江華島ヨリ三里(日本里)ノ海上ニテ艦長ニ  
面セリ

森 以下兩語ニ出レハ雙方共ニ人共ニ語ル丁マリ故ニ伏致ノ  
ニ字ヲ以テ區分スル條アリ  
叔今日ハ問情下サレテ黍トシ粳熟ハサ

テ置キ先刺ヨリ兩人ニテ申セシ如ク不日  
江華ニ前往スベキニヨリ不都合ナキ  
様ニ取計ラハレヨ今改メテ公告ス

堂 謹領ス免角江華ニ飛援セラレテ御用  
着手ニ及ブベシ某マタ尽ミカセン  
是レヨリ雜話ニ涉ル

堂	御両君ノ年齒ハ
宮	四十歳
森	三十五歳
宮	兩君ハ
堂	四十六歳
宮	然ラハ餘程長クカヲ國事ニ尽サレシト 存ス
訓	某ハ四十歳即テ大丞殿ト内行ナリ
宮	主申テ御坐ルカ
訓	丁酉
宮	然ラハ陽陰兩曆ノ差アリ某ハ君ニ長スル 一歳ナリ
訓	叔是レマラ多年ノ往事ハ森山君ニハ最初 ヨリ某ガカノ及ガハ所トハ思ハルバカヲ 尽スノ是ラザル所ト思ハレシナランガ保シ 今日此地ニ相面晤ス心ニ自ラ樂シ
森	某モ然リ
訓	ト譯ト堂トノ說話アリ 但シ浦瀨訓應ヨリ密話アリ 浦瀨言附ス
宮	江華留守ハ趙秉式氏ト聞ク然ヤ
彼	然リ
森	趙甯夏氏ト同族カ
彼	全ク別ナリ
森	甯夏氏ハ恙ナキヤ
彼	然リ
堂	何レ江華ニ内行アリテ趙秉式ト面接ア ラハ種々事情モ明亮イタスベシ貴諭ノ

如ク直ニ京城ニ向ハル、ヨリ江華ヨリセ  
ラル、方頒ナラン、ト申シテモ某が貴大  
臣ノ京城宛行ヲ忌ニテ申スニハ非ラス  
又趙寧夏が書ヲ森山公ニ贈リシ一事モ  
某善ク之ヲ知レリ然ルニ日氏ハ彼書ヲ  
贈リシカ為メ今日ニテハ却ラ不首尾ノ  
次第ナリ

當時氏宰相ノ事変アリテ實書ヲ受ガ  
リシハ固ヨリ至理ニ非カレトヘテ日ニ至リ  
公平ニ之ヲ論ズレハ却テ彼時受ゲガリシ  
トガ幸ナリシカ如シ何トナレバ彼時  
彼書ヲ受クルモ我内國ニ必ラズ不測ノ  
苦情起ルベキ筈ナリキ今日ニ至リテハ

事一挙、決シ事却テ事ラン

我國ニ於テモ特ニ大臣ヲ派セラル要ス  
ルニ成否必決ニ在リ

譯ト堂トノ終アリ 訓導又浦瀨、密話又浦瀨書取中、  
譯、大臣ニ告ノ 堂申スニ今固ノ終判ニ於テ趙寧

夏ノ贈書モ照會ニ出ルヤトノコナルニヨリ  
順序次第ニヨリテハ出サルベシト答ヘシ  
ニ然ラバ今日某等が申ス所モト申スニヨリ  
夫レハ今日ノコハ大ナル相違ナリ云ヤト  
答ヘタリ

官 北京ニ至ルニハ山海關ヨリ牛莊ニカ、リテ  
行クヤ

堂 否晋陽ヲ過ル

天津ヲバ經過セラレシカ

宮 某ハ彼ノ地方ニ至ラス

森 某モ彼ノ地ニ至ラス

官 同行中ニハ彼所ニ至リシ者多クアレモ

等兩人ハ未タ遊期ヲ得ズ

陸 昨年北京ニテ貴國大臣返都後鄭氏ナル

人駐留セシト覺フ

森 然リ鄭永寧ナル人ニテ暫ク欽差代理タリ

宮 山海関ヨリ上レバ人烟ナシト聞ク然リヤ

堂 山海関ヲ超ユルモ人烟ナキニ非ラズ注

途ノ歎アルニ至ラス

宮 然レモ雪深ク此頃ノ未往使節ハ行路甚

ク難カラシ

堂 寒ハ極テ甚

宮 某カー友支那地方ヨリ貴國境上マデ遍遊

セシガ地形不潔ニシテ且ツ寒ク甚ク困難

セシトテ詩ナド作りシアリ

我 鷗録紅ヨリ牛莊マデノ距離ハ

堂 四五十里

牛莊ニハ領事官ヲ置カレルカ

宮 天津ト兼帶ナリ

堂 領事官ハ支那中ニテ何処ニ在ルヤ

官 天津上海澳門及ヒ英領ナレモ廣東省ノ香

港

堂 其辺ノ地方ニハ屢々遊覽セリ

堂 畧地理ヲ談ス

<p>我 然り電信機ハ全国ニ縱横シテ網ノ如シ</p>	<p>堂 電字ヲ手書ス</p>	<p>我 申間ニ一條ヲ架セントセリ長サ數百里</p>	<p>至ル一條既ニ成レリ今マタ西京ト東京ノ</p>	<p>我 神戶ヨリ大坂ニ至ル一條横濱ヨリ東京ニ</p>	<p>彼 陸路蒸気ハ</p>	<p>此ノ如シ</p>	<p>其等内務ニ関セス之ヲ明知セザルモ大抵</p>	<p>我 日本形ハ數万西洋形ハ三百位ナラン</p>	<p>汽船軍船貴國ニ幾多隻アリ</p>	<p>彼 誠ニ然リ</p>	<p>並ノ如シ</p>	<p>森 火船開ケテヨリ貴國ノ如キハ直チニ謀</p>	<p>堂 某善ク其然ルヲ知ル</p>	<p>シ各國ノ人在ラザルナレ</p>	<p>宮 日本京城ニ至レバ世界ノ事情悉ク知ルベ</p>	<p>二人輒然ト笑ヲ呈ス</p>	<p>我 依然トシテ迎ヘシ</p>	<p>入レラル、ヤ</p>	<p>堂 吾々如キモ家族ヲ提ケ貴國ニ往カバ善ク</p>	<p>我 近來極メテ多ク商客三千人モアラン其他使</p>	<p>僮包丁トナリ或ハ船舶ノ仕役トナレルモ</p>	<p>ノ甚タ多シ</p>	<p>我 貴國人ノ清國ニ往キ行商ナルモノハ甚タ多</p>	<p>カラザレハ清人ノ貴國ニ往クハ殊ニ夥シ</p>	<p>キガ如シ</p>
----------------------------	-----------------	----------------------------	---------------------------	-----------------------------	----------------	-------------	---------------------------	---------------------------	---------------------	---------------	-------------	----------------------------	--------------------	--------------------	-----------------------------	------------------	-------------------	---------------	-----------------------------	------------------------------	---------------------------	--------------	------------------------------	---------------------------	-------------



東京ヨリ上海ト一日中ニ坐談スベシ  
 事ヲ朝廷ニ啓陳スルモ東京ニ至ルヲ要セス  
 左様ナリ右様ニアリテヨリ人間ノ住スヘキ  
 世界ト云フベケレ  
 時訓、艦内ヲ一見セントモ乃チ之ヲ船長ニ謀ル  
 森 是ヨリ猶小ナル船猶アリ却テ用ヲナス  
 堂 大モ小モトク火輪船トサヘ去ハバ此ノ如キ  
 者ト思ヘリ成程小ナル方が便ナラシ  
 官 貴國ナドモ火船ヲ造リ鳥渡天津ナドニ  
 通航スルニハ小ナル好シ  
 堂 我國ニ火船ヲ備フル様ニ至テ至ルハ中々  
 程長キ丁ナルマシ何特<sup>レ</sup>此之ヲ見ルノ  
 日アラシカ  
 森 何國ニテモ同一形勢ナリ唯開明ノ進歩  
 ニ随テ自ラ成ルベシ  
 堂 去リナカラ世界<sup>中</sup>ニテモ我國杯ハ殊ニ近遠  
 ノ國ナレハ如何モシ  
 官 石炭アリヤ  
 堂 有リ而モ之ヲ燃<sup>ル</sup>リ用フルノ法ヲ知ラズ  
 官 石炭アルハ大ニ好シ  
 堂 然リ我國モ鉄ト石炭ヲ燃ル<sup>ト</sup>ヲ知ラハ國  
 必ガ富マン  
 我 然リニシ  
 堂 開化ノ人ニ遇ヒ開化ノ終ヲ為ス情意殊ニ  
 舒ブ  
 今日ハ是ニテ御暇申サシ

先刻ヨリ某が陳スル所々真ナリ更ニ虚偽  
 ナシ眞実ヲ告ガレバ一方が茫然トシテ  
 何モ辨知セザル相手ナルニヨリ事ノ大錯  
 誤ヲ生スルヲ恐ル  
 某等ハ今日ノ事情ヲ詳細ニ具陳スルモ  
 我朝之レヲ信スル者ナキニヨリ唯一通りヲ  
 啓報シ其上命ヲ待テ帰京スベシ  
 宮  
 厩刻ヨリ種々ノ懇諭有リ難シ併し一通リ  
 啓報ト申サレテモ江華前往ノ義ハ必ラズ  
 遺漏セラル可ラズ  
 堂  
 其ハ固ヨリナリ因テ京ヨリ直ニ江華留  
 守ニ下命アラバ故ヲ失スル所ナカルベシト  
 雖モ若シ其前ニ急ニ前往ノ事アラバ  
 念ナキニアラサレモ之ニ關係スルコトナク  
 直チニ上陸セラレズテハ事自ラ將明ザル  
 ベシ  
 堂上予ノ官職姓名ヲ問フ而テ予官名ノ應ズ  
 ベキナレ乃チ太政官出仕未松謙澄ト云フゾ  
 以テシ且ツ今回辨理大臣ノ随行トシテ書記官  
 ノ役ニ從ヘバ今ヨリ時々接光スルコトアルベキノ意ヲ  
 致ス堂曰ク江華迎接ノ日ニ及ハ、屢々會晤ノ  
 期アラシ  
 是ニテ談畢ル叔南陽府使ニ宛タル口陳書ハ持  
 チ歸ラズ格別ノ勅旨ナキニヨリ某等ヨリ  
 其主趣ヲ啓報スル方可然トノコトナレニ官曰フ  
 此書ハ凡彼モ悉ク且ツ漫々人ヲ上陸セシメテ

却テ物情ヲ擾サレテ恐レテ今日マデ達  
延シタレヒ又合マデニ持返ラル、方然ラ  
ント云フ彼レ云フ漢江トハ江義ヨリモ上流  
ニ在リテ南北等ノ別アルナシ之ヲ我朝ニ  
出サハ却テ之ヲ見テ日本人地理ニ暗シト  
ト疑念ヲ起スベキヲ恐ル矣曰ク我人ハ江華  
島ノ左右ニ流ル、所ヲ總稱シテ漢江ト云  
フ彼曰ク我が鮮人ハ尤様ニハ思ハス然ラ  
バ字ヲ改メテ孫石江トシテハ如何ト哉  
即チ孫石江、何レノ部タルヲ問クニ圖  
ニテ江華前ノ海濱ヲ指ス森曰ク江華前  
湾トナサン堂曰ク江華前江トナスノ  
愈レルニ若カス議遂ニ決シ江華前江ト  
改竄シテ其書ヲ渡ス堂之ヲ受テ曰ク本  
書ヲ進送スルニ主旨ヲ陳述スルニ唯當  
ニ便宜ニ後ニ啓報ニ事ノ順成ヲ主トスヘ  
シト是ニ於テ二人艦中ヲ一覽シテ去ル時  
ニ午後三時半ナリ

一月三十日宮本外務大丞森山外務權入丞  
 司訣院堂上官吳慶錫訓導玄昔運下應  
 接問訓導ヨリ私へ及内話候次第  
 訓導ヨリ一昨秋理事官ト擬約ノ節貴國書契  
 中天子ノ文字ヲ願クハ皇上下御改被下候ハ  
 可然趣及御内話候ハ實ハ朝旨ヲ得之上ノ誤ニ  
 無之何分右ノ文字御變通不相叶事ヲ十分認  
 候ヨリ天子ノ文字ヨリモ皇上下相成候ハ都  
 表ノ周旋方ニ便法ナラント見込候儀ハ  
 心付ニ出候事ニ候又内務ノ節翰使右書  
 契御費レ御渡海ノ上直ニ東萊へ御出被下  
 候様書面差出候儀ハ是亦朝令ハ無之候  
 へ共右書契御渡レノ義是非東萊へ御入り  
 無之候テハ落着ニ不到モヨウニ付書面  
 差出置御渡館ノ上何分不都合無之様相  
 尽候心組ニ罷在候所豈因ランヤ廟躰一變  
 終ニ今日ノ不都合ト相成タル事ニ候然此  
 今若シ右ノ二件ヲ奉テ公然御照會被下  
 候時ハ私ハ一命朝露ヨリモ輕ク忽テ  
 刑罪ニ被蒙候ハ目前ニ有之候間何分  
 御助命被下候道ヲ御心得被下度偏ニ  
 歎願イタレ候  
 私等御内情ヲ羨リ候ハハ氣ノ毒ニモ存レ候  
 へ共公事ニ私意ヲ加ヘレハ足下ノ過チニテ  
 特ニ合般ノ御拭合ト申モノハ古今未曾

有ノ大事件ニテ仲ニ一言半句モ彌縫不  
相成事ニ候尤兩國ノ大臣御親接貴國ニ  
於テ聊モ無異議事承伏ノ上講和順便ニ  
歸シ彦節ハ已往ノ義ヲ御討論可有之  
様無之ハ勿論ナレトモ貴大臣ノ御答へ  
振リニヨリテハ順序ヲ追テ御演説ニ可  
被為及事ナシト云ベカラス其時ニ至テハ  
不得止次第ニ候實ニ公明正大ノ外有  
之間敷候

訓導 實ハ趙寧夏ノ朝命ヲ不得シテ書簡  
往復ニ被及シモ元ト憂國ノ情ニ出テ專西  
國和好ノ目的ニ被致タル事ニ候処尋盟  
順便ニ不帰随テハ大成ル咎ト相成居候

供此人ハ大王大妃ノ御兄弟故ニ物議有之  
ノミニテ相濟彦へトモ僕カ事ハ一ト度御  
論及相成ニ於テハ忽命脉ヲ落シ候場合故  
万分御願念被下返々モ助命ノ道御言被

下置候様致願イタシ候  
私ヨリ此節ノ御談判ニ於テハ聊私情ヲ以弥縫杯  
ノ事ハ決シテ擔當難相成事有之能ハ御兼知  
可相成候

輜ノ御應接ノ間ヲ見合テ  
訓導ニ向ニ理事官廣澤公先被ノ節草深和  
館ニ於テ御同然及御内話候一件上京ノ上要  
路ノ方々へ充分尽カイタシ候処御内話申置  
候通ニ許可ヲ得候ニ付既ニ去ルニ日突都ノ

心組ニ罷在便処存外却船ヲ見候ハ候付發足  
見合候如何ニモ不堪遺憾事候  
私何ト許可ヲ被得候ヤ

訓導貴國御書契皇上ヲ聖上ト御改被下勅  
ノ字御省キ相成ニ於テハ大日本ノ大字ハ勿論  
御國文書契及ヒ新服製トモ總テ異議無之  
御請可申事ニ朝談相觸シ候託候

私左様ニ候哉猶モ皇勅等ノ事ヲ被申笑止ノ  
至リ候候候此森山理事官在館中矢  
解ノ旨ニ随ヒ御返答ニ相成候ハ貴國ノ信  
義モ相見ハ理事官ノ尽力モ行届随テハ御  
日前ニモ頗ル好都合ナルニ今日ニ至リテハ  
遺憾ノ事ニ候是モ貴國ヨリ自ラ求メラレ

シ義ニハ不得止次弟ト存候

明治九年一月三十日

浦瀬 裕